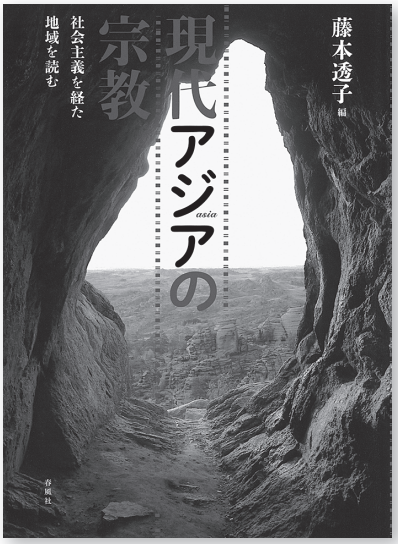
現代アジアの宗教
──社会主義を経た地域を読む



藤本透子編
春風社／2015 年／本体　4,200 円＋税

20 世紀に社会主義をさまざまなかたちで経験したアジアの国々では、反宗教政策の下で力を失ったとみられていた宗教が、しばしば社会的重要性を増している。さらに、国境を越える大規模な移動や、経済開発に起因する社会変容に伴って、宗教は新たな展開をみせてきた。宗教の（再）活性化メカニズムをふまえ、地域社会の人々にとって宗教がもつ意味を明らかにし、社会と宗教の関係を再考するため、国立民族学博物館共同研究（若手）「内陸アジアの宗教復興──体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」（2010 ～ 2012 年度）を組織した。本書はその成果として刊行されたものである。

第Ⅰ部では、中央アジアのイスラームについて論じた。ウズベキスタンではイスラーム復興の後に国家による統制が逆に強まったが、地域社会における結婚・離婚をめぐっては民法とイスラーム法の二重構造がみられる（和崎聖日　中部大学全学共通教育部）。また、マハッラ（街区）が 2000 年代に急激な経済・社会変化を経験するなかで、女性の社会進出に対応したイスラームのあり方が求められ始めた（菊田悠　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）。一方、カザフ社会では、中東諸国との行き来、在外カザフ人のカザフスタンへの帰還、かつての遊牧の記憶という 3 種の移動が、死者儀礼を中心とするイスラーム実践の再活性化につながり、社会を再編する原動力となったのである（藤本）。

第Ⅱ部では、モンゴルのシャマニズムとチベットのボン教を検討した。中国内モンゴルでは、補助霊でしかなかった動物霊がシャマンに憑依し始め、伝統の意味が問い直され師弟間ネットワークが再編されていった（趙芙蓉　国立民族学博物館外来研究員）。また、モンゴル国で、仏教徒であるハルハにもシャマニズムが広がっていく現象は、相対的劣位に置かれた人々の力の逆転の試みと捉えられる（島村一平　滋賀県立大学人間文化学部）。中国のチベット社会では、カリスマ性のある僧侶の存在が、僧院復興後にボン教が存続する際の求心力となり、共同性を生み出していることが明らかとなった（小西賢吾　金沢星稜大学総合研究所）。

第Ⅲ部では、中国西南部から東南アジア大陸部にかけての上座仏教について検討した。中国雲南省の国境地帯では、文革時には国境を越えて仏像を避難させ、改革開放後には国外から僧侶を招くなど、国境を越える移動が仏教の復興に重要であった。それと同時に、経典の朗唱法などに関しては地域に根付いた実践を保持してきた（小島敬裕　京都大学東南アジア研究所）。カンボジアにおけるポル・ポト政権崩壊後の仏教の再生にあたっても、「浄域」を見出す想像力／創造力が一つの基盤となるなど、地域の人々の実践こそが重要性をもっていた（小林知　京都大学東南アジア研究所）

このように、各地の事例は多様であるが、教義そのものというよりも、むしろ慣習的とみなされてきた日常生活における宗教実践が、政治体制の急激な移行や急速に進む市場経済化に起因する社会不安のなかで人々のよりどころとなった点は共通する。また、国境が画定された際にひとつの民族が分断された場合が少なくないため、非社会主義国と社会主義国の間の移動、旧・現社会主義国間の移動も宗教動態に影響を与えてきた。社会主義を経験しなかったアジア諸国と比較すると、旧・現社会主義国では宗教機関の整備が充分に行われず、教義の統一もあまり推進されなかったという特徴があり、それが改革および体制移行後における地域性の強い宗教実践の（再）活性化に結びついている。

現在、宗教動態は 1990 年代のそれとはさらに異なってきており、ナショナリズムやエスニシティが以前ほど声高には主張されなくなった反面、国家の政策に対応しながらも統制をすり抜けるような宗教実践が、地域社会の再編あるいは新たな分断をもたらしている。たとえば、宗教の（再）活性化の初期には、社会主義体制下で宗教的知識をほそぼそと受け継いだ人々が中心となっていたが、宗教教育機関が整備されるにつれて新たに宗教教育を受けた若い世代が中心となったため、世代間にはギャップがある。このため、若い宗教指導者が地域社会を再編する核となり得るのかは、難しい問題をはらむ。こうした状況の下で、宗教指導者に対し一般の人々が求めるのは宗教的知識よりむしろ感情に訴えかける力である場合も多く、宗教が地域社会の動向にいかに関わっていくのか今後も注目される。

このように宗教は人々を新たな形でつなぎ、社会の変化の方向性を決定づける重要な要因となってきたが、一部の地域では宗教の（再）活性化があまりみられない場合もある。また、キリスト教ペンテコステ派など非伝統的宗教が広がりをみせていることについても、本書では取り上げられなかった。これらの点を今後の課題として、宗教と社会の関係についての考察をさらに進めていきたい。

文　藤本透子

国立民族学博物館民族文化研究部助教。専門は文化人類学、中央アジア地域研究。著書に『よみがえる死者儀礼──現代カザフのイスラーム復興』（風響社 2011 年）、『カザフの子育て──草原と都市のイスラーム文化復興を生きる』（ブックレット≪アジアを学ぼう≫⑲　風響社 2010 年）、共編著に『カザフスタンを知るための 60 章』（明石書店 2015 年）。